

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：30105

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25870648

研究課題名(和文) 対人的距離化スキルの規定因を探る -個人内・社会文脈要因からの検討-

研究課題名(英文) Determinants of the interpersonal distancing skill use: social information processing and attachment style

研究代表者

石井 佑可子 (ISHII, Yukako)

藤女子大学・文学部・准教授

研究者番号：40632576

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、現実生活で有用性を持つと考えられる対人的距離化スキルの規定因を探ることであった。

実験的質問紙調査・質問紙調査・面接調査の結果、対人的距離化スキルの機能にはリスク回避と、相手への配慮や迎合であると示唆された。また、行使に影響を与えるのは、他者に対するネガティブな印象評定(見下し、狡猾さなど) 本人のアタッチメントスタイル 子どもの頃に経験した養育者からの対人的距離化スキルに対する肯定的反応などであることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to explore the determinants of the interpersonal distancing skill use which is effective for relationships in a real-life. The investigations revealed that the functions of the interpersonal distancing skill are risk-avoiding and assentation to others. It has also been shown that this skill use depends on (1) the negative evaluations to other, (2) one's attachment style, and (3) the positive responses to the distancing skill use from one's parents in their childhood.

研究分野：社会心理学 発達心理学

キーワード：対人的距離化スキル 社会的情報処理 アタッチメントスタイル

1 . 研究開始当初の背景

社会的スキル研究は生態学的妥当性における弱点(日常生活における現実場面での対人関係行動と理論との乖離)が度々指摘されてきた(e.g. Marzillier,1978 ; Trower,1995 ; DeRosier & Marcus,2005;渡辺・星,2009)。こうした問題の原因としては,社会的スキル研究が想定している具体的なスキルの中身が,親和や主張といった,いわゆる「望ましい」行動に偏っていることにあると考えられる。現実場面を鑑みると,実際の対人場面は望ましい表出スタイルのコミュニケーションのみではなく,巧みな欺瞞や回避によっても成り立っていることは容易に推測可能である。本来は,このような望ましくない表出の対人行動についても目を向けなければならないといえる。

以上のことを解決するために,新たな社会的スキルレパートリーの1つとして,対人的距離化スキル(回避や欺瞞由来のネガティブな表出スタイルのコミュニケーションスキル)が提案され,本研究申請時点までにはその有効性が部分的に示されていた(e.g. 石井・新堂,2011)。

しかしながら,距離化スキルの効果を現実的に支えるその他の要因や,距離化スキルの個人差については,十分には明らかになっていなかった。そこで本研究では,対人的距離化スキルについての更なる解明を行うため,個人差を規定する要因について考究することとした。その際,対人的距離化スキル行使の個人差をもたらす規定因として主体属性などの個人内要因と,生育歴などの発達の要因について焦点を当てた。また,距離化スキル行使を支える社会的情報処理傾向の個人差についても検討することとした。

2 . 研究の目的

- (1) 対人的距離化スキルと社会的情報処理傾向との関連を検討すること
- (2) 対人的距離化スキルと,主体属性としてのアタッチメントスタイルとの関連を検討すること
- (3) 対人的距離化スキル獲得の道筋を,被養育経験から検討すること

3 . 研究の方法

(1) 社会的情報処理傾向との関連

高校生・大学生男女計 344 名を対象とした実験的質問紙調査を行った。質問紙は,社会的スキル尺度(対人的距離化スキルと,従来の社会的スキルにあたる対人的接近スキルの双方を測定するもの)と,男女各 1 名の表情写真刺激(無表情・怒り・幸福・恐怖)から成っており,スキル尺度については親密性が低・中・高程度の相手に対する行使頻度を,表情刺激については対象人物の属性(信用性・明晰性・狡猾性・優しさ)と,評定者自身に対する態度(騙し意図・友好意図・見下し)の推測を問うものであった。

(2) アタッチメントスタイルとの関連

高校生男女計 291 名を対象とした質問紙調査を行った。質問紙は,スキル尺度と,アタッチメントスタイル尺度として中尾・加藤(2004)による成人愛着スタイル尺度一般他者版(ECR-GO)で構成されていた。

(3) 距離化スキル獲得の道筋

大学生男女計 7 名を対象とした面接調査を行った。調査対象者の距離化スキル獲得に養育者がどのように関わっていたのかについて探索的に調査するため,養育者から受けた対人関係に関するしつけや,調査協力者の対人的行動に対して養育者がどのように反応していたかについて,幼少期から現在(大学生時点)までを回顧的に尋ねた。特に,距離化スキルに繋がりを対人行動(回避や欺瞞)に対して,養育者がどのように反応していたかを詳しく尋ねた。また,(1)の調査で,距離化スキルがリスク回避の際に効果を持つことが示唆されたことから,各年代での困ったことに関する思い出について問い,それに対して養育者がどのような助言をしたのかについても質問した。

4 . 研究成果

(1) 社会的情報処理傾向との関連

スキル行使得点と表情刺激評定得点との相関分析を行ったところ,女性のみ群(高校・大学生)で,狡猾・見下しなどの,自己にとってネガティブな結果が想定される印象評定と,親密性が比較的高くない条件における距離化スキルの行使得点が関連していた(表 1)。

表 1 女性の距離化スキル行使と,男性・女性顔刺激に対する狡猾・見下し評定との相関分析結果

	親密性高条件	親密性中条件	親密性低条件
(高校生女子)			
狡猾	.05	.17	-.10 .22* -.13 .27**
見下し	.03	.02	.03 .05 .00 .06
(大学生女性)			
狡猾	.09	-.01	.07 .09 -.01 .25*
見下し	.17	-.09	.27** .04 .08 .21*

左右の数値は「男性顔への評定値との相関係数 / 女性顔への評定値との相関係数」を表す。

*は 5% , **は 1%水準で有意であったことを示す。

これは,距離化スキルとリスク回避傾向の関連が示唆される結果と解釈できる。男性群ではこれらの関連がみられなかったが,高校生男子群においては見下し認知と親密性低条件の接近スキル行使との負の相関がみられた($r = .49, p < .05$)ため,自らを脅かす可能性のある相手に対しては少なくとも関係を維持する行動を抑制することが推測される。

また,大学生男女群では対象者の明晰さ認知と距離化スキルとの関連が,搾取・騙し意

図・見下し評定を統制しても変わらず認められた(男性:親密性中条件での統制後 $r=.42$, 女性:低条件での統制後 $r=.26$ 共に $p<.01$)。これについては、青年期後期にとって他者の賢さは、たとえ相手が自分の資源を直接搾取しようとしていなくても、競争場面で自分を出し抜き、自信やアイデンティティを脅かすリスクになりうると推測できることから、それを回避するために、相手の明晰さを認知しやすい傾向が距離化スキル行使の高さに繋がるのではないかと考察された。これらは、距離化スキルがリスク回避と関わっている結果と解釈できる

その他の結果として、大学生男性群で、女性顔に対する優しさ認知と接近スキルの負の関連が、騙し意図評定を統制してもみられた(中条件: $r=.31$, $p<.01$, 低条件: $r=.28$, $p<.05$)。つまり、この年代の男性は異性のことを、(騙し意図を感じずに)優しそうだと認知すると、親和や主張コミュニケーションを減じるといえる。これは距離化スキルの機能を直接示すものではないが、この群における親密性中・低条件での接近スキルと距離化スキルとは弱い負の相関関係にある(中条件: $r=.26$, $p<.01$, 低条件: $r=.29$, $p<.05$)ことから、距離化スキルの機能にも多少の示唆を与えるかもしれない。ただし、これをリスク回避機能と関連づけて解釈することは難しい。むしろ、そこには、相手への思いやりや迎合機能が含まれるのかもしれない。力としては自分の方が強くなっていると推測できる年長者の異性に対して、優しさというポジティブな属性を感じることができるほど、配慮という形で接近スキルの抑制(及び距離化スキル行使)という対人関係行動をとること考えられる。

この調査を通して、距離化スキル行使と対人刺激への認知傾向とに一定の関連が見出せ、このスキルの機能や性質の解明が一步進んだといえる。今後、対象となる社会的刺激や情報処理傾向の範囲を広げて検討することで社会的スキルの実際行使に至るまでの過程が詳らかになるだろう。

(2) アタッチメントスタイルとの関連

ECR-GOの下位尺度である親密性回避・見捨てられ不安得点と各スキル得点との相関分析を行ったところ、距離化スキルと親密性回避との間には有意な相関がみられず(親密性高中低条件の順に、 $r=.10/.11/.08$, $p=n.s$)、これらは独立したものであると示された。距離化スキルの具体的中身である戦略的な回避・欺瞞行動は、アタッチメントスタイルの親密性回避が示している、相手への不信に基づくやみくもな回避や対人撤退によって構成されるわけではないといえるだろう。しかし、距離化スキルは親密性高・中条件において、見捨てられ不安との間に弱い正の相関が認められた(親密性高中の順に、 $r=.17$, $p<.01$ / $r=.15$, $p<.05$)。これはこのスキルに、

(1)の成果で示唆された、相手への迎合という性質がある可能性をさらに示したといえるかもしれない。

また、ECR-GOの得点に従って、調査対象者を安定型・恐れ回避型・とらわれ型・拒絶回避型に群分けし、これらのアタッチメントスタイルによって、スキル行使得点に差があるか検討した。その結果、大体の親密性条件において、距離化スキル、接近スキル共にとらわれ型群が高く行使する傾向がみられた。また、相手との親密性に応じた距離化スキルの使い分けとして、安定型と拒絶回避型が親しさを増すごとに順にスキル行使を減じていく一方で、恐れ回避型では親密性中条件と低条件の間にスキル行使頻度の差が無く、共に親密性高条件の時に比してより多く行使するという結果になり、とらわれ型においては親密性の主効果が認められず、どの相手に対してもスキルを多用することがうかがえる結果となった(図1)。

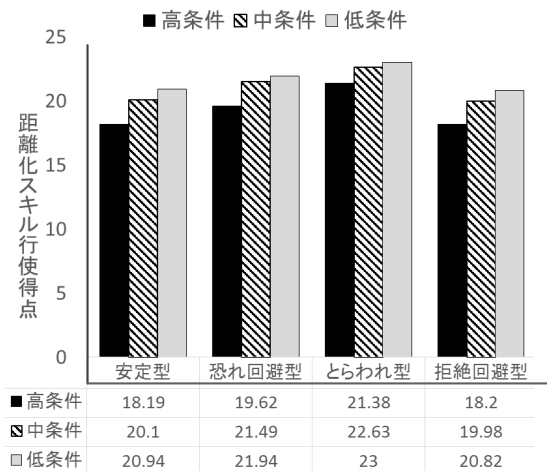


図1 アタッチメントスタイル・親密性条件別の距離化スキル行使得点

これらの結果は従来のアタッチメント理論と概ね合致するものであり、距離化スキル行使の個人差を規定する個人特性としてアタッチメントスタイルが重要であると示唆された。そしてさらに、有している対人的枠組みによって、同じ社会的行動であっても個人々人にとっての意味や機能が異なる可能性も示唆された。今後は、アタッチメントスタイルの違いによる、距離化スキルと適応指標との関連の多様性などを検討することも要される。

(3) 距離化スキル獲得の道筋

面接の結果、社会的行動に関わる養育者の明示的指示は幼少期に多く行われ、児童期後期頃からは養育者が積極的に指導するのではなく、子どもの対人関係行動に反応する形で対人行動獲得を支えていく様子が示唆された。

また、距離化スキルの有効性に意識的に気

が付いたきっかけとして、養育者から嘘や回避を肯定するような明示的声掛けを受けた経験と、本人の嘘に養育者が気づいていながら詮索しなかった経験が全ての調査対象者のエピソードから得られた。いずれにも共通していたのは、本人が対人場面や達成場面において困難な状況に陥り、養育者がそれを察知した場合に限られていた点であった。ただし、これらについての気づきを得た時期は対象者によって異なっており、幼児期から青年期までの広い期間に亘っていた。

個人差が見られたエピソードは養育者による対人行動のしつけに関してで、子どものベースラインの社会性の様子に応じて向社会行動を明示的に促すか否かが分かれることが明らかとなった。

この結果は、被養育経験における距離化スキル発達の端緒となるだろう。しかし、今回はスキル獲得を促す存在として養育者に絞って調査したため、それ以外の人物についても検討する必要がある。実際に、今回の調査でも、教師からの働きかけや、教師の関わりに対して養育者が取った行動がその後の対人行動に影響したとみられるエピソードが得られていた。また、今回は対象者間の明確な差を洗い出すまでは至らなかった。今後サンプル数を増やして、個人差に関わる養育要因を明らかにする必要がある。

<引用文献>

- DeRosier, M. E., & Marcus, S. R. (2005). Building friendships and combating bullying: Effectiveness of SS GRIN at one-year follow-up. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology*, 34, 140-150.
- 石井佑可子・新堂研一. (2011). 在宅非行少年における社会的スキルの様相--メタ認知, 対人的距離化スキルの観点から. *臨床心理学*, 11, 65-76.
- Marzillier, J. S., & Winter, K. (1978). Success and failure in social skills training: Individual differences. *Behaviour research and therapy*, 16, 67-84.
- 中尾達馬・加藤和生(2004). 一般他者を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討. *九州大学心理学研究* 5, 19-27.
- Trower, P. (1995). Adult social skills: State of the art and future directions. In O'Donohue, W. & Krasner, L. (Eds), *Handbook of psychological skills training: Clinical techniques and applications* Boston: Allyn and Bacon. pp54-80.
- 渡辺弥生・星雄一郎. (2009). 中学生対象のソーシャルスキルトレーニングにおけるセルフマネジメント方略の般化促進効果. *法政大学文学部紀要* 59, 35-49.

5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

- 石井佑可子(2017). 社会的スキル行徳と対人的枠組みとの連関—アタッチメントスタイルからの検討— 藤女子大学文学部紀要第 54 号 pp117-139. (査読無)
- 石井佑可子・高橋翠・遠藤利彦(2015). 対人的距離化スキルと社会的認知傾向の連関—顔刺激に対する印象評定からの探索的検討— 藤女子大学文学部紀要第 52 号 pp99-109. (査読無)
- 石井佑可子. (2015). 青年期における対人的距離化スキルの発達の変遷: 性差を含めた検討 (コミュニケーションの心理とライフステージ, 及び一般). *電子情報通信学会技術研究報告. HCS, ヒューマンコミュニケーション基礎*, 114(440), 199-202. (査読無)
- 石井佑可子 (2014). 青年期における社会的スキルの発達の變遷—メタ認知・対人的距離化スキルの機能から— 藤女子大学文学部紀要第 51 号 pp75-96. (査読無)

[学会発表](計8件)

- 石井佑可子(2017). 個人特性が対人的距離化スキルの効果に及ぼす影響. 日本発達心理学会第 28 回大会 (広島国際会議場 自主シンポジウム「情動知性再考—全人的視座からみる情(へ)の知性」話題提供)
- 石井佑可子(2015). 非認知的能力追究をめぐる困難と期待—心理学はどう取り組むか. 日本心理学会第 79 回大会 (名古屋国際会議場 自主シンポジウム「非認知的能力」をめぐる研究と心理学—社会の発展・個人の発達・教育の可能性— 話題提供)
- 石井佑可子(2015). 青年期のアタッチメントスタイルと社会的スキルの関連—対人的距離化スキル概念, 相手との関係性条件を加えた検討. 日本家族心理学会第 32 回大会 (山形大学 ポスター発表)
- 石井佑可子(2015). 青年期における情動制御の発達の變遷: 青年期前期・中期・後期の社会的スキル比較から. 日本発達心理学会第 26 回大会 (東京大学 自主シンポジウム「情動制御の発達—生涯発達を軸に—」話題提供)
- ISHII Yukako (2015). Do inter personal distancing behaviors prevent against getting involved in a juvenile delinquency? The Society for Personality and Social Psychology is thrilled to announce our 16th Annual Meeting (California, Long Beach,

USA Poster Presentation)

石井佑可子(2015). 青年期における対人的距離化スキルの発達的変遷—性差を含めた検討— 電気情報通信学会HCS研究会1月研究会 (ペイリゾート小豆島 ポスター発表)

石井佑可子・高橋翠・遠藤利彦(2014). 対人的距離化スキルと社会的認知傾向の連関 2—顔刺激に対する印象評定からの探索的検討— 日本心理学会第78回大会 (同志社大学 ポスター発表)

石井佑可子・高橋翠(2013). 対人的距離化スキルと社会的認知傾向の連関—表情刺激の評定からの探索的検討— 日本心理学会第77回大会 (札幌コンベンションセンター ポスター発表)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

石井 佑可子 (ISHII, Yukako)

藤女子大学・文学部・准教授

研究者番号：40632576